

放送日： 平成 20 年 6 月 1 日
タイトル： C 型・B 型慢性肝炎
担当者： 医師 南部 卓三

今日は、B型およびC型慢性肝炎についてお話します。今年の 4 月から、これらの病気におけるインターフェロン治療に対する助成金制度もグレードアップしましたので、そのことも併せてお話します。

皆さんは、「慢性肝炎」という病名をお聞きになったことがありますでしょうか。肝臓の細胞が傷んで肝臓の働きが悪くなる「肝障害」には、アルコール性のものや太りすぎに伴う脂肪肝などが多く、これらは生活習慣を変えることで改善が維持できます。しかし、今日お話する「慢性肝炎」、なかでも「B型・C型慢性肝炎」はB型肝炎ウィルスやC型肝炎ウィルスに感染して起こるもので、生活習慣を改善したからといっても治りません。根治するにはインターフェロンを使ってウィルスの活力を止めてしまわなければなりません。

B型・C型肝炎ウィルスは、血液を介して人へ感染します。感染している母親からの新生児へと出産のときに感染することがあるほか、過去に医療機関で受けた血液製剤の注射や輸血によって感染を起こす事例もあり、こういった事例は今、問題となっています。一方で、「どういう経路で感染したか全く思い当たらない」というケースもかなりの割合で見られます。

さて、感染後はどうなるのでしょうか。潜伏期を経て慢性肝炎が起こり始めても、当初は全く症状がありません。肝臓は「静かなる臓器」と呼ばれ、症状がなかなか出ません。症状がないまま数年から 20 年ほどの経過をたどり慢性肝炎が進行し続けて、ついに「肝硬変」になってくると、やっと「体のだるさが取れない」とか「食欲不振が続く」といった症状が出てきます。そして、さらに肝硬変が進むと、皮膚や白目の部分が黄色くなる「黄疸」や、お腹に水が貯まるといった症状が出てきます。肝臓癌が見つかることが多いのもこの時期で、すでに生命の危機に陥っています。結局のところ、症状が出てからでは遅いということです。

B型あるいはC型肝炎ウィルスに感染しているかどうかは、血液検査でわかります。症状がなくても一度検診を受けてみることをお勧めします。

では、B型・C型肝炎の治療にはどんなものがあるのでしょうか。従来、「肝炎の進行を遅くする」薬しかなかったところへ 20 年ほど前、ウィルスを撲滅する方法としてインターフェロン治療が登場しました。当初、画期的な治療といわれたものの、インターフェロンは 1 日おきに打たねばならなかったことや、注射のたびにインフルエンザのような症状が出るなど結構大変だということが知られるようになりました。また、特にC型肝炎では、1 年近く治療を続けてはみたものの、根治成功率は 10%程度でした。

しかし、最近では改良品が開発され、その様相もずいぶん変わりました。ペグ製剤と呼ばれるその改良型では、まず注射の頻度は週 1 回になり通院治療が随分楽になりました。また、注射後の副作用も従来のものより随分と穏やかになりました。基本的に 1 年ほど注射を続ける必要はありますが、その結果得られる根治成功率は 60%以上という成績となりました。もちろん、インターフェロンの副作用が出る場合は、やはりあります。事前に主治医と十分な相談が必要です。

なお、インターフェロン療法では医療費の問題が従来より言われていました、治療費が嵩むので治療を受けづらい、というものです。しかし、これにも良いお知らせがあります。高額治療費の一部助成制度はこれまでもありましたが、今年の 4 月からはインターフェロン治療にかかる医療費の助成制度がさらに整備され、患者さんの負担が大幅に減ることとなりました。制度の詳細は少しややこしいのでここでは割愛します。詳しくは病院窓口や保険所にお問い合わせ下さい。

B型慢性肝炎、C型慢性肝炎についてまとめますと

ひとつ

「静かなる臓器」肝臓に症状が出たときにはずいぶん進んでしまっている、ということで、自覚症状がなくとも一度血液検査を受けましょう。

ふたつ

もしウイルス感染がみつかって治療の対象となるものであれば、根治をめざしてインターフェロン治療を受けるべく、主治医と十分に相談を。

そして、みっつ

インターフェロン治療を受けるなら、医療費助成制度も活用しましょう。

以上です。